

Campus

218

全代会の広報誌

Apr. 2019

平成の変遷

筑波大学の平成を振り返る

広がる看護、繋がる看護

【連載特集】各学類・専門学群を知ろう！

全代会概論

あなたの知らない全代会のすべて

全代会活動報告





2019年5月に新元号へと移行し、平成に区切りがつけられる。そこで、平成期における筑波大学を振り返り、どのような出来事があったのかについてみていく。
 (編集人: 軽辺凌太、北村夏海、瀬邊風馬)

平成期における筑波大学の変化

「平成期における筑波大学を語る上でキーワードとなるのは『交通』と『国際化』だ」と佐藤忍副学長(学生担当)は話す。

一つ目の『交通』に関しては、以前からいくつも問題点が上がっていた。広大な敷地に対して未発達な交通網もその内の一つで、陸の孤島という言葉に象徴されていた。転機を迎えたのが平成17年のつくばエクスプレス開業である。秋葉原〜つくば間が最速45分で結ばれたことで、学生や教職員の通学・通勤時間が短縮されたことは大きな変化だった。

平成25年にはICタグを用いて自転車・バイクの管理を行うIC-Cycle制度が導入された。「導入のきっかけとなったのは東日本大震災だ」と佐藤副学長は話す。震災時に至る所で自転車が倒れ、建物の入り口や通路が塞がれた。学内の自転車が管理されるようになったことで、建物の出入口や点字ブロック上の駐輪がなくなり、身体障害者に優しく、避難経路の確保にも繋がったという。

二つ目の『国際化』に関しては、平成21年には留学生の受入体制の整備をはじめとし、大学の国際化を図るグローバル30に採択された。以

前は日本語を話すことができる留学生・教員が多数派であったが、採択以降、非日本語話者の学生・教員が増えたという。平成26年には文部科学省が創設したスーパーグローバル大学(SGU)事業の採択、グローバルコモンズ機構の設立と、より筑波大学の国際化が進んだ。

平成31年度からは新しい元号が施行され、総合選抜に向けた新たなカリキュラムが始まる。次の元号ではどのような変化がみられるだろうか。



平成期の筑波大学を振り返る佐藤副学長

激動の平成とこれから

平成4年の筑波大学卒業アルバムを見ながら、山澤学准教授（人文社会学系）は学生時代を振り返った。

山澤准教授は平成元年4月に筑波大学に入学した、平成最初の筑波大生だ。印象に残っている出来事として、在学中に起こった世界を揺るがす事件の数々を挙げた。

旧ソ連解体の際には、当時住んでいたアパートの隣人であるロシア出身の留学生から、家族が殺されるかもしれないという不安を耳にしたという。「当時から筑波大学は留学生が多く、グローバルな変化を目の当たりにした。冷戦が終わると、例えば社会主義思想の発言力が弱まるなど世界の価値観が大きく変わり、同時に学問も大きく変革していった」と山澤准教授は話す。天安門事件が起こった際には、追越共用棟で中国や台湾出身の留学生が集会を開いていたという。

山澤准教授は教員として筑波大学で16年間学生に接している。在学生の頃と教員になった後とを比べて、学生の気質が変化していると山澤准教授は考える。平成の初めとSNSの普及した現在ではコミュニケーションの方法が異なり、昼夜問わず

面と向かって意見を言い合える場が少なくなっている点を挙げた。

今の筑波大生は意志や主張がやや弱く、積極性も少々不満に感じるものの、社会への関心や基礎学力など、大学で学ぶ前提は整っているという。そのような基礎の力を今後どう応用できるかが課題だと山澤准教授は指摘する。

「筑波大学が創立以来変わらない理念として掲げている学際性を活かして、広い視野や自分の主張をしっかり持ちながら、良い経験を積んでほしい」



平成4年の卒業アルバムを手にする山澤准教授

平成のつくばおよび筑波大学

- 1985年（昭和60年）● 西武筑波店開業（昭和56年常磐道開通）
- 1987年（昭和62年）● つくば市誕生
- 1988年（昭和63年）● 常磐道、三郷からいわき開通
- 1991年（平成3年）● 大学設置基準の大綱化
- 1992年（平成4年）● 江崎玲於奈氏が学長に就任
- 1998年（平成10年）● 北原保雄氏が学長に就任 / ひたち野うしく駅誕生
- 2004年（平成16年）● 国立大学法人法により国立大学法人筑波大学を設置
岩崎洋一氏が学長に就任
- 2005年（平成17年）● 新学内バス開始 / つくばエクスプレス（TX）線開業
- 2007年（平成19年）● 学群の改組・再編に伴い、人文・文化学群、社会・国際学群、人間学群、生命環境学群、理工学群、情報学群及び医学群を設置
- 2008年（平成20年）● iias TSUKUBA（イーアスつくば）開業
- 2009年（平成21年）● 山田信博氏が学長に就任 / 留学生30万人計画（G30）開始 / 国際バカロレア入試（IBO）開始
- 2010年（平成22年）● ブランディングの一環として「IMAGINE THE FUTURE. (ITF.)」を導入
- 2011年（平成23年）● 東日本大震災の発生により卒業式が中止になり、青空入学式が行われた
- 2013年（平成25年）● 永田恭介氏が学長に就任 / ICycle 導入
- 2014年（平成26年）● スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）採択 / グローバルコモンズ（GC）設立→留学促進
- 2017年（平成29年）● グローバルヴィレッジ（GV）設置 / 西武筑波店閉店 / 大学内でキッチンカーの本格運用開始
- 2018年（平成30年）● イオンつくば駅前店閉店およびCREO（クレオ）閉館
大学敷地内につくばショッピングプラザ「SAKURA TERRASSE（サクラテラス）」開業
（店舗はスーパーマーケット（カスミ）とカフェ（サザコーヒー）で構成されている）
- 2019年（平成31年）● SF(Specialty Finding Term) 教育開始
- 2020年 ● 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開催
- 2021年 ● 総合選抜入試導入

広がる看護、繋がる看護

【連載特集】各学類・専門学群を知ろう！

看護師は医療関係の職業の中で最も患者さんと接する立場にある一方、看護活動を行うには専門知識や手技が必要とされる。また医療の発展のために看護人の存在は不可欠であり、今日では国際的な活動も行われている。今回は高度な看護学習と国際教育の両立を図る看護学類について特集する。(編集人：十川澄、宮内順也)

短期大学部から 看護学類へ

看護学類は平成15年度に前身の医療技術短期大学部から改組し設置されたという経緯がある。「学生がより高度な看護能力を会得し、臨床現場で活躍していくためには、4年制大学で専門的に看護教育を行う必要がある」と森千鶴看護学類長(医学医療系)は話す。一学類として看護教育を行うことで、職業教育として看護師を育成するだけでなく、学問としての看護学を体系的に学習できる。また体系的な学習により科学的根拠に基づいた看護活動を行えるという。「患者さんに十分なケアを提供できるよう系統的に看護学を教えるいき、看護の知識・手技・問題解決能力のレベルも高くしていきたい」と森学類長は語る。



看護学類の教育を語る森看護学類長

国際・専門・リーダー性 ある看護教育

看護学類ではリーダーシップを発揮できる看護師の育成を理念とし、グローバル・専門的・高度な看護教育を展開している。グローバル教育の一環として、4年生の希望者がアメリカやモンゴル、ベトナムの大学へ2週間から8週間の短期留学をするプログラムを設置している。また筑波大学の「Japan expert」プログラムを通して留学生を受け入れ、日本文化とヘルスケアシステムに触れるための教育を展開している。グローバル教育を取り入れることで、日本の看護技術を発展途上国へ伝播させるといった国際活動に取り組むことができる」と森看護学類長は主張する。

学習カリキュラムを体系的に構成することでも専門的な看護職の実現を目指す。基礎科目には「人体の構造と機能」「臨床心理学」といった科目があり、人体や心理、公衆衛生、保健衛生についてなどを学習する。また専門科目として基礎看護学、母性看護学、小児看護学など、看護に関する分野について概論・方法論・実習を通じて学習していく。「看護学類では学生が学びやすいよう3年次までに必須科目をほとんど終え、4年次には留学を含め、各自で選択した専門分野に取り組みやすいカリキュラムが構成されている。看護師免許を取得し、さらにキャリアアップを目指してほしい」と森学類長は話す。

今後は今年4月に実施される看護学類カリキュラムの改定にあたり、チーム医療も重視した教育を目指していきたいという。

卒後の幅広い活動へ

改組されて16年目を迎えた看護学類だが、卒後の進路が多様である。卒業生の多くは看護師として全国の医療機関で活躍する一方、筑波大学大学院に進学し、看護学をより専門的に学習する卒業生もいる。また筑波大学に教員として戻り、後進らの指導に尽力する卒業生も多くなっている。そのほかにも学校や地域医療の健康維持・増進に貢献する養護教諭や保健師、さらに国際機関の「ICN」や厚生労働省といった公的機関へ進む卒業生を輩出している。このように様々な立場から看護職は求められ、それぞれの現場で主導的役割を發揮する必要があるという。「今後国際的な活躍も増加することを踏まえて、リーダーシップを發揮できる看護師を育成していきたい」

看護学類の教育理念・目標

- ・学問的に看護を学び、臨床現場で実践できる教育
- ・国内だけでなく、国際貢献できる看護職の輩出
- ・さまざまな活動現場でリーダーシップを發揮できる看護師の育成

患者さんの 強みを引き出す

「尽くすことは大事だけど、尽くしすぎてもいけない。過保護は患者さんのためにならないと気付いた」と永長里佳さん（看護学類2年）は話す。入学するまでは、看護師は患者に寄り添い患者を助ける職業というイメージを持っていた。しかし、1年間看護学類で学ぶことを通して、患者が病気や怪我と闘っていくときに、患者自身の人間性や強みを引き出すことによって患者を支えていくことが重要だと考えるようになったという。

永長さんはもともと人のためになる仕事をしたいと考えていた。高校の課題で、在日外



自身を振り返る永長さん

国人が医療サービスを受ける際に生じる問題について考えてから、医療関係の職を目指すようになったという。これらの中でより患者の心に寄り添うことのできる職業として看護師を選んだ。「患者さんの考えをしっかりと聞いて理解したうえで、共感できる看護師になりたい」と永長さんは話す。

高校の恩師に 勧められて

「元々生物が好きだったので、理科の教師になろうと考えていた」と佐藤岳さん（看護学類3年）は話す。理科の教師を目指していた佐藤さんは、高校生の時に担任の先生に医療系を勧められた。これをきっかけに医療分野に関心を持ち始め、高校3年生の夏に医師体験に参加した。「昼食の際に医師、看護師、理学療法士、介護士として働いている人達にそれぞれ話を聞き、人の役に立っていることをより実感できる看護師が最も自分に向いていると感じた」と佐藤さんは語る。

筑波大学では看護だけでなく他の分野も学べると考えていたが、未だできていないこと



Campus を手に取る佐藤さん

が心残りだという。「サークルや勉強、バイトに加えて何かをするのは難しい」と佐藤さんは話す。看護学類のカリキュラムは他学類と比べて選択の幅が狭く、また単位を修得しないと留年する科目がほとんどだ。そのため専門科目に集中せざるを得ないという。自由科目をとるにはまだハードルが高いようだ。

みんながいるから 頑張れる

「看護学類には、面倒見が良く真面目で優しい学生が多い」と濱津みもさん（看護学類4年）は看護学類の魅力を語る。大変なときや辛い気持ちのときに、慰めあったり励ましたりできることで、互いの存在が心の支えになっているという。

看護学類では3年次の秋学期から本格的に実習を行う。さまざまな病棟を回って1、2週間、あるいは退院までの間、患者1人を受け持つ。実習では実際に患者と出会い、彼らが置かれている状況に直面する。その患者に何が必要なのか、どうすれば良いのか考え



看護学類の魅力を語る濱津さん

助産師になりたくて

「4年間きちんと看護の勉強をしたいから看護学類を選んだ」と菊池若奈さん（人間総合科学研究科看護科学専攻1年）は話す。菊池さんは現在、助産師を目指して勉強している。6歳の時に生まれたばかりの弟を抱き上げた体験から助産師に興味を持ち始めた。出産時に母親を一番近くで手助けできる助産師になろうと決めたという。

菊池さんは高校生のときに、筑波大学附属病院での看護体験に参加して以来、看護学類を志望するようになった。当時の看護体験と看護学類で行った実習では、自身の立場が異なるため、得られる知見が大きく異なるとい

実践することに対して、濱津さんは実習のたびに難しさを感じているという。「対象や看護を理解するための今までの学びが活き、深まっていく感覚がある」と濱津さんは話す。実習を通して、ライフステージ、暮らしや価値観など、患者の個性に応じた多様な看護があることを身をもって学んでいるという。

う。「実習では、患者さんの前でいつも笑顔を絶やさない看護師さんのシブい面も見えた」と菊池さんは話す。看護師は患者にとって一番身近な人間でありながら医療従事者でもある。「4年間の学習を通して、看護師は医師と患者さんの橋渡しをする役割を担っていると考えてようになった」と菊池さんは語る。



志望の経緯を語る菊池さん

全代会概論

あなたの知らない全代会のすべて



筑波大学には、学則で様々な学生組織が定められている。その中の一つが全学学類・専門学群代表者会議（全代会）だ。全代会は、学内全般の問題を取り扱い、全代会の意見は学生の総意として扱われる。ここでは、そんな全代会の概説をする。
 (編集人：瀬邊風馬)

「全代会」とは

大学ループ道路沿い、大学公園バス停近くの道路を入ると、黒と白の外装が施された建物が見えてくる。「共同利用棟D」と名付けられたこの建物の中では、今日も全代会の構成員が活動している。

全学学類・専門学群代表者会議、略して「全代会」は、学生一人一人の意見や要望を集め、大学に伝えるための学生組織だ。

全代会の活動は2つある。学生から集められた意見や要望を議題として審議する「会議」と、学内の諸問題に大学側と連携して専門的に取り組む「委員会活動」である。

全代会で活動するには、「座長団」か「専門委員」という2種類の方法がある。「座長団」は各学類・専門学群のクラス代表者の中からさらに選出され、前述の「会議」に出席するメンバーにあたる。また、「座長団」は委員会にも所属する。「専門委員」は委員会活動のみを行い、学内における諸問題の解決に尽力する。「専門委員」には筑波大生であれば誰でもなることができる。ぜひ様々な形で全代会の活動に参加してほしいと、全代会新歓担当の軽辺凌太さん（地球学類2年）は話す。

昨年の活動を振り返って

「全代会」という組織の価値をどう見出し、どう伝えていくかが課題だ」と、平成30年度の全代会議長を務めた四家武彦さん（知識情報・図書館学類3年）は語る。四家さんは全代会の議長として、全代会の会議を運営し学生の総意をまとめたり、学内外の関係組織と連携したり全代会とのつながりを強化したりするなどの活動を行ってきた。「外部との連携は可能な限り推進しようと考えていた。迅速かつきめ細やかに対応し、良好な関係を築くように努めた」と四家さんは議長としての活動を振り返る。

今後の全代会における課題には、人手不足を挙げた。昨年度は本会議の出席人数が少なく流会となり、議決を採ることができない事態が度重なって発生した。「委員会活動でも、人手不足が原因で個人に負担がかかりすぎる状況が見られた」と四家さんは話す。会議日程を早期に共有する、会議出欠の意思を繰り返し尋ねる、クラ代議長と連携して出席率の改善を目指すなど議長として複数の対策を講じたものの、改善には至らなかったという。

「人手不足の原因は全代会の活動

に価値を見出せない学生が組織の内外で増加していることにあるのではないかと四家さんは分析する。全代会の価値をどう捉え、築いていくかということ、そのために能動的な活動を展開していくこと、これらが学内で全代会の価値を実感してもらうために必要だと四家さんは指摘する。

「全代会」の名を冠する以上、全代会の意見は学生1万人の総意になる。そのため全代会は常に学内からの意見や批判を必要としている。より多くの人が主体的に関わることでさらに魅力的な全代会が生まれるだろう。課題も多いが次期以降の発展を楽しみにしている」と四家さんは語る。



今年の全代会について展望を述べる四家さん



昨年の審議を振り返る楊さん

昨年の実績

平成30年度中に全代会が挙げた実績のひとつに、大学との取り決めである「学園祭実行委員会について」の改正がある。「学園祭実行委員会」に関する特別委員会」の委員長としてこの改正に当たった楊欣海さん（比較文化学類3年）は、「全代会と学園祭実行委員会の双方に利益のある改正を目指した」と話す。

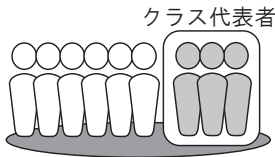
今回の改正の要点は次の2点だ。一つ目は、全代会の下部機関である学園祭実行委員会が常設化されたことである。これまでの学園祭実行委員会は単年度組織であり、毎年度末に解散という形を取っていた。これ

が原因で前年度までのノウハウをうまく生かせなかつたという。「常設化されることで、引き継ぎの円滑化が期待できるだけでなく、学外と交渉する際に明確な肩書が持てるため活動しやすくなる」といった利点がある」と楊さんは話す。

二つ目は、全代会における会議の負担を軽減したことである。学園祭実行計画書に関する議案の一部を学内行事委員会と議長団の専決とし、全体での審議を必要とする会議へ提出する議案数を抑制した。「学園祭実行委員会委員長・副委員長の任命も議長団の担当になったが、慎重に面談を行うなど、今まで以上に重点的な検討が期待される。また、議題数の削減によって全代会の審議日程にゆとりが出た。この時間を有効活用したい」と楊さんは語る。

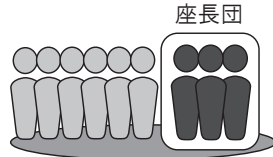
楊さんは学園祭がより良くなることを期待して今回の改正を主導した。「今回の学実委常設化に伴い、これまでの雙峰祭のノウハウを存分に活用して、より良い学園祭を作り上げてほしい」と楊さんは話す。

クラス会議



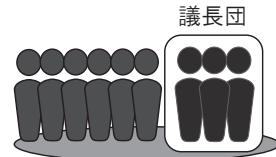
学類・専門学群内のクラスごとに、学生の要望により開催される。

クラス代表者会議



学類・専門学群で開かれ、クラス会議の代表者が議論する。

全学学類・専門学群代表者会議



全学規模で開かれ、クラス代表者から選出された座長団が出席する。

全代会の委員会



総務委員会
事務部門 / 情報部門

全代会の庶務を担当し、会議の準備や物品の補助を行う。情報部門では、全代会室のPC環境やウェブサイトの管理を行う。



学内行事委員会

全代会の下部機関である学園祭実行委員会やスポーツ・デー学生委員会の監査・監督を行う。また、各サークル連合会など学内行事を運営する組織と全代会をつなぐ役割も持つ。



教育環境委員会

全学的な教育に関する問題を扱う。学習環境や授業内容の問題について検討し、大学と連携して改善する。



生活環境委員会

学生生活に関する問題を扱う。学生宿舎や学内の売店、交通などに関する問題を検討し、大学や業者と連携して改善策を模索する。



調査委員会

学内の問題を幅広く扱い、調査を行う。座長団などからの依頼をもとに調査し、問題の解決を大学に求める。



広報委員会
編集部 / 制作部

全代会の広報を行う。全代会の活動や学生に有益な情報を発信するために、広報誌『Campus』やポスターの制作、Twitter アカウントの運営を行う。

全代会 活動報告

11月 21日 第十回本会議
12月 5日 副学懇
12月 12日 第五回意見聴取会

第十回本会議

日時…11月21日(水) 18時30分
場所…5C216
出席…39人

議題①
『履修申請期間中の授業への出席
に関する要望』

承認…39
否認…0
保留…0

↓全会一致で可決
議題②
『2019年度監察役選出に
ついての報告』

承認…39
否認…0
保留…0

↓全会一致で可決
○議題について

議題①については第四回本会議で全会により、採決を行うことができなかった議題について再度、審議が行われた。履修申請期間中の出席を履修の条件や成績評価に反映することを取りやめる趣旨の議題であり、採決の結果全会一致で可決された。

議題②については2019年度監察役として、相川さくら(情報メディア創成学類3年)と猪瀬百合子(生物学類3年)が選出され、全会一致で可決された。



副学懇

日時…12月5日(水) 18時30分
場所…第2エリア食堂
出席…副学長、教職員、
全代会構成員、他

実施内容
副学長等と全代会構成員との懇談会(副学懇)では、全代会の活動を報告し、提出された議題を話し合う。毎年末に開催され、全学レベルでの学生の要望を共有する大切な会として位置づけられている。

今回の議題は、「全代会構成員の新たな選出方法について」だ。全代会は、意見聴取会ならびに本会議に出席する座長団の数が少なく、議決や情報共有に大きな支障をきたしているという問題に直面している。また、総合選抜導入に伴う学類等内の人数変化も、座長団選出方法の改訂には欠かすことはできない情報だ。そこで、複数案の選出方法が示され、活発な意見交換が行われた。

懇談の後総評として、「全代会の生の意見が聞けてとても有意義な会になったのではないかと」加賀信広(学生生活支援室長)は述べた。



第五回意見聴取会

日時…12月12日(水) 18時30分
場所…5C216
出席…22人

議題
『全代会の組織に関する
特別委員会設立の報告』

○議題について
今後の全代会の運営方式に関して、多面的に考えていくために全代会の組織に関する特別委員会設立の提案がなされた。具体的には、全代会の人手不足解消のために全代会の選出制度について検討を行う。平成33年度以降の導入が決定している総合選抜を経て入学する学生の意見を全代会としてどう集めるかを検討するなどの活動を行うために、特別委員会を新たに設立するというものである。

審議の中では、全代会の人手不足を示すデータの妥当性に関する指摘や、人手不足解消の方法として全代会構成員の選出方法を変える以外にも手段があるのではないかとという意見、総合選抜入学者のクラス代表者会議の取り扱いは関する質問などがあり、活発な議論がなされた。



第六回意見聴取会

日時…1月9日(水) 18時30分
場所…5C216
出席…27人

議題①
『平成30年度筑波大学学園祭
総括報告書承認の報告』

議題②
『学園祭学生分担金の額及び
納入方法について』

○議題について

議題①では、学園祭総括報告書と目的の評価について審議が行われた。学園祭総括報告書においては、計画通りに活動が進められたか、また、適正な予算であったかについて議論がなされた。目的の評価については、来場者アンケートの回答等を参考に、内容を審議した。

議題②だが、学園祭学生分担金は、年度ごとに金額を設定し、学群入学者全員から在籍予定年度分を一括で徴収するものだ。学園祭学生分担金の額は適切か、納入方法はこれまで通りで良いのかという点に関して議論がなされた。



1月

9日

第八回意見聴取会

16日

第十一回本会議

◆第十一回本会議

日時…1月16日(水) 18時30分
場所…5C216
出席…41人

議題①
『平成30年度筑波大学学園祭
総括報告書承認の報告』

承認…040
否認…0
保留…0

↓全会一致で可決

議題②
『学園祭学生分担金の額及び
納入方法について』

承認…040
否認…0
保留…0

↓全会一致で可決

議題③
『総合選抜導入に関わる組織改編
特別委員会設立の報告』

承認…133
否認…1
保留…4

↓否決

○議題について

議題①では、学園祭総括報告書及び目的の評価の内容について審議が行われ、全会一致で可決された。

議題②だが、平成31年度は学園祭学生分担金を1年につき600円と定め、入学・編入年度に在籍予定年数分を一括で納入することが決定した。

議題③については、入試制度改革に伴った総合選抜入学者に関するクラス代表者会議制度及び座長団制度について検討等を行うことを目的とした総合選抜導入に関する組織改編特別委員会設立の是非が問われた。審議の結果承認数が規定数に達しなかったため否決となった。

◆新歓ネット

新入生歓迎ネットワークは各学類・専門学群の新歓団体の委員長が参加し、全学規模での新歓情報の交換を行う場だ。新入生歓迎特別委員会(新特委)が主催し、情報や物品の支給、宿舍入居時の支援等を行う。また、各新歓団体同士の交流の場を設ける。

第一回新歓ネット

日時…12月7日(金) 18時30分
場所…1C210
出席…各新歓委員長、新特委員

実施内容

新入生歓迎特別委員会と各新歓団体の代表者の出席で行われた。顔合わせの回であったため、各新歓団体が自己紹介を行った。その後、新入生歓迎特別委員会から新歓ネットと新入生特別委員会や関連団体についての説明が行われ、さらに筑波大学紫峰会基金新歓援助金の申請に関して、概要と申請の際に注意すべき点が説明された。



第二回新歓ネット

日時…1月17日(木) 18時30分
場所…1C210
出席…各新歓委員長、新特委員など

実施内容

新入生歓迎特別委員会から五者面談について説明があった。五者面談は学内学生組織の委員選出の日時決定のために行われるものである。学内学生組織は学則により各学類・専門学群より委員選出が必要となるため、新歓オリエンテーションの際に新入生に学生組織の説明を行っている。五者面談ではこの学生組織の説明のほか、宿舍祭実行委員会による説明も行われる。



◆新入生歓迎特別委員会

新入生歓迎特別委員会(新特委)とは、学内における新入生歓迎時期特有の諸問題に関して対処するために設立される特別委員会だ。各学類・専門学群単位での新入生の歓迎のために、確実かつ統一された情報の提供を行う。

主な活動内容は各学類・専門学群の新入生歓迎団体が行う活動の支援、および筑波大学紫峰会基金への援助金申請補助、合格発表日の学内巡回や宿舍入居等の支援、安全対策推進委員会に関わる活動等がある。

また、新特委は学内学生組織を統括する役割も持つ。学園祭実行委員会、スポーツ・デー学生委員会、宿舍祭実行委員会、各学類・専門学群の新歓団体の連携が円滑に行われるよう全学規模の新歓情報の提供を行う。



詳しい情報はここから


↓全代会HP↓

<https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/>



平成30年度の本会議で審議・採決された議案

第二回	・履修申請期間中の授業への出席に関する要望	承認26、保留11、否認1で否決
第三回	・平成30年度学園祭実行計画書に関する要請	承認38、保留0、否認0で可決
第四回	・平成31年度学園祭開催に関する要請 ・新入生歓迎特別委員会設立の報告 ・履修申請期間中の授業への出席に関する要望	定足38人に満たず流会
第五回	・平成31年度学園祭開催に関する要請	承認41、保留0、否認0で可決
第六回	・平成30年度学園祭実行計画書追加提出分に関する要請	定足38人に満たず流会
第七回	・新入生歓迎特別委員会設立の報告 ・平成30年度学園祭実行計画書追加提出分に関する要請	承認43、保留0、否認0で可決 承認42、保留0、否認1で可決
第八回	・「学園祭実行委員会について」の改訂に関する要請	定足38人に満たず流会
第九回	・「学園祭実行委員会について」の改訂案 ・「学園祭実行計画書の承認過程に関して」の提議 ・「学園祭実行委員会委員長・副委員長任命に関して」の提議	承認42、保留0、否認0で可決 承認42、保留0、否認0で可決 承認43、保留0、否認0で可決
第十回	・履修申請期間中の授業への出席に関する要望 ・2019年度監察役選出についての報告	承認39、保留0、否認0で可決 承認39、保留0、否認0で可決
第十一回	・平成30年度筑波大学学園祭総括報告書承認の報告 ・学園祭学生分担金の額及び納入方法について ・全代会の組織に関する特別委員会設立の報告	承認40、保留0、否認0で可決 承認40、保留0、否認0で可決 承認33、保留4、否認1で否決

全代会は専門委員を募集しています

 **専門委員募集中**

委員会	活動日	活動内容
総務委員会 事務部門 / 情報部門	火	全代会の活動の補佐及び情報の管理を行う
学内行事委員会	木	全代会と学内の行事を運営する関係組織を繋ぐ
教育環境委員会	火	全学的な教育環境に関する問題について取り扱う
生活環境委員会	火	学生の生活に関する問題について取り扱う
調査委員会	火	全代会として取り組むべき問題の調査・報告をする
広報委員会 編集部 / 制作部	木	全代会の広報と学生に有益な情報を発信する

ご連絡はこちらまで zdk@stb.tsukuba.ac.jp

Campus

全代会の広報誌
Apr. 2019

No. 218
2019年4月1日発行

記事制作者より

専門委員として広報委員会に所属して約1年が経った。素敵な先輩方や同期そして頼もしい後輩に恵まれ、1年間活動できたことに感謝したい。今後もCampusが読者にとって有益な情報を提供できるように広報誌でありますように。

【北村夏海】

今年度は大変多忙で、講義や実習に取り組みと同時に、全代会の会議・委員会や学類内の課外活動にも努めた。多くの人が様々な悩み・問題を抱えていることや、組織で動くことに対する責任の重大さを痛感した。これらの経験が将来、責任ある立場になったときに活かすことができれば幸いである。

【宮内順也】

表紙制作者より

広報委員会に入ってから1年が経った。知識も技術も何もない状態でのスタートだったが、この1年で自分ができることが少しは増えていけば良いと思う。残りの時間が有意義なものになるよう努めていきたい。

【鈴木瑠夏】

編集後記

前号を最後に一個上の先輩方が引退し、自分たちが最上級生となった。今まで頼ってきた先輩方がいないと心もとなない気持ちになるが、今度は自分たちが頼られる存在になるのだという自覚も少しずつ芽生えてくる、この号はそんな号だった。

今年のこの時期には編集部5人制作部1人の計6人しかいなかった。自分の代で残る人は自分と現制作部長のみの状況。先輩方とCampusの制作を辞めるか議論した。自分が「ページ数も号数も減らさない。意地でも次に繋ぐ」と言い張って昨年の発行状況を維持することになった。

そんな広報委員会も、今では同期4人と後輩6人が新しく加わり、計12人で活動している。自分の努力と意地と睡眠時間の結晶を少しずつ溶かすようにして、今後の活動を楽しみたい。

【十川澄】

BACK NUMBER



Campus No.217 2019/01/08
特集：冬を上手に乗り越える

災害大国の羅針盤／知識の海に潜る
全代会活動報告



Campus No.216 2018/10/02
特集：筑波山再考

共生社会の実現に向けて／全代会の2018年度
全代会活動報告



Campus No.215 2018/04/01
特集：「フォトジェニック」を探しに行こう

「資源」は「農業」だけじゃない／全代会概論
全代会活動報告



Campus No.214 2018/1/10
特集：夜空を見上げる冬のひととき

正しく叱ろう／日本と世界との架け橋
全代会と学生・大学のこれから／全代会活動報告

STAFF

編集人	十川澄
発行人	軽辺凌太
表紙デザイン案	鈴木瑠夏
編集委員	新真澄 軽辺凌太 北村夏海 児玉稀乃 小林美優 四家武彦 瀬邊風馬 鈴木瑠夏 十川澄 近森正太郎 西堀涼香 宮内順也

発行 全学学類・専門学群代表者会議
広報委員会



<https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/>
zdk@stb.tsukuba.ac.jp

バックナンバーは1学食堂内のボックスで配布しています。
ウェブ版『Campus』公開中 <https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/>

広報委員会では随時専門委員を募集しています。興味のある方は上記のメールアドレスまでご連絡ください。